



2001年春の出来事

日方圭子

英国・サリー大学助産課程学生(ダイレクトエントリーコース)

スタディデイに参加する

英国の助産雑誌を見ると、全国各地で開かれているワークショップや講義の一覧が載っている。ロンドン周辺だけでも行きたい講義はいくつもあるけれど、日程と参加費を考えるとどれもというわけにはいかない。それでもこの春、3つのスタディデイに参加した。

① 自宅出産サポートグループが主催した自宅出産のスタディデイに、NCT(National Childbirth Trust)講師のアニーと、彼女の友人で自宅出産を計画している3児の母リンと3人で、2時間弱ドライブして参加した。学生料金は10ポンド(1700円)と格安だった。会場で英国在住の日本人助産婦・ターナー節子さんに会えたのもうれしかった。

② 私の実習先の病院は、スタッフと学生を外部の講義に送る予算がない代わりに、病院内で勉強できる機会を多くしようとしている。その一つ、母乳促進の1日勉強会があった。参加者は助産婦、看護婦、保健婦。助産学生も6人、休日を利用して参加していた。

③ 誰でも参加自由の無料の講義を定期的に開いている大学がロンドンにあるので、その一つに、友人の英国在住の日本人助産婦たちを誘って行ってみた。「触診するか、しないか?」。触診一つにしても医療者にとって必要だからするというのではなくて、もっと女性中心のケアをしようという議題だった。学生、大学講師、現役助産婦が参加してのインフォーマルな1時

間強で、自分の大学しか知らない私には、他大学の校舎で講義を聞いているだけでなんと新鮮だった。

この講義に誘った日本人の助産婦たちは、みな同い年くらい。語学留学をしながら英国の助産婦の資格を取ろうとしている人、修士課程進学予定の人、施設研修にきている人で、初対面の人が多かったのだが、集まってみるとなんと頼もしくうれしくなった。

ジェニーが辞めた

イースター休暇明け、大学での講義が再開したその日、2人目の退学者が出たことを知った。ジェニーはおとなしいけれどしっかりした印象の18歳だった。お母さんが元助産婦だから、助産婦の仕事と勉強について現実的な情報をもっているはずだし、前回の小論文で最高点を取ったのを知っていたから、彼女の退学には驚いた。なのに1人目の退学のときよりショックは少なかった。

辞めるきっかけは実習だった。メンターとの日程が合わずに複数の助産婦についての仕事に不満があったことは、同じ地域で実習中のクラスメイトたちが知っていた。さらに、指導教官兼病院とのリンクティーチャーが長期不在だったし、彼女と気軽に相談できる関係を作っていなかったのもいけなかったらしい。大学に相談して解決策を探る前に、決断をしてしまったのは本当に残念。ジェニーは今年の秋からサリー

大学の環境生物学部への入学が決まっているから、キャンパスでまた会う機会がありそう。

ジェニーのことから、入学したてのころ、助産学生のメーリングリストに先輩学生からのアドバイスがあったことを思い出した。「実習中は特に周りにサポートしてくれる環境を作るのが必須。自分で対処できないことには溜め込まず、同級生、指導教官、メンター、家族に話すこと。後に引きずったり、なかったことにしないで処理していくように。これがコースを辞めない秘訣」と。

実習中不満があって、指導教官に問い合わせをして問題解決をした学生は2人いたらしい。ただ、あと2人、とても不満で不幸せなまま実習を終えて戻ってきた人がいた。もちろん、その他はみな実習を楽しんで帰ってきたけれど、実習報告会でみな体験談、感想を聞いた後、このままでは2度目の実習が始まる前に退学準備軍が2人いると、不安になった。

バイトを始める

学生の多くがバイトをしているし、家庭を持っている同級生のカレンもデビーもフルタイムで学生／妻／母をしたうえて、週末は仕事をしているのを見て、学生以外何もしていない自分は甘いな、と思った。トラベラーズチェックが切れて奨学金だけでは生活できなくなったのも要因になったし、友人たちのバイト先の話を聞いて興味ももっていた。

その1人の「学ぶことが多いよ」の言葉のことで、障害者施設、老人ホーム、病院でのケアアシスタントに挑戦することにした。ケアアシスタントは看護学生に人気のあるバイトで、この経験を通して看護コースに入ってきた学生も多くいるし、大学側も入学の際経験者を優先的に採用するようだ。

派遣会社に登録し、週1度の仕事を見つけてもらうことにした。初仕事は当日行って初めて、アルツハイマー症の施設だということに気



英国在住助産婦と共に参加したシティ大学の講座の後で。英国助産婦のキャロリン・フリントさんと出会う。左から、遠藤亜貴子さん、キャロリン・フリントさん、横手直美さん、星裕子さん

づいた。痴呆症の人はおろか、老人と接する経験が今までほとんどなかったので、この1日はイギリスに来て以来の衝撃的な日になった。

私の語学力のなさ、コミュニケーション下手もあるけれど、おばあちゃん、おじいちゃんの記憶と話の混乱している度合いが分からず、意思が通じず苦労した。少したって話を全部まじめに取っちゃいけない、ということに気がついたけれど、この日はまず、家に帰りたがるおばあちゃんという現実を前にして、悲しくてやりきれない思いで仕方なかった。

人をケアするという意味では繋がる部分もあるけれど、助産とはやはり違いが大きくて、このバイトを続けるのは難しかった。それに人手が足りない施設に当日になっていきなり送られるのは車を持たない私には不便だし、毎回違ったところへ行くのでクライアントやスタッフとよく知り合う機会もなく、その日の穴埋め以上の仕事ではなかったので、何かと不満だった。だから2か月後に他のバイトが見つかってさっさと辞めた。

5月

試験が2つあったおかげで楽しめない月だった。ただ倫理、法律の授業が始まって、元看護師・現在弁護士の講師の授業が目新しく、毎回おもしろかった。